

2022年8月14日

## わたしをお遣わしになった方は真実

ヨハネによる福音書 8：21～30

### ・理解するための鍵

先週の金曜日の祈禱会は、夏の時期で飛び飛びとなりますので、いつものエレミヤ書ではなく、マルコによる福音書を共に学びました。箇所は「種をまく人のたとえ」でした。イエス様は、このたとえを語られる時、どうしてたとえを語るのか、その理由をお話しなっておられます。その理由は、イエス様の言われる意味をとらえて言えば、結局「分からなくするため」、つまり、「自分が分かっていることが分かるため」なのです。何が分かっているのか、それは「神の国の秘密」なのです。この「神の国の秘密」とは、結局神様が私たちが愛してくださっているという真実なのです。

私たちは「神の愛」を受け取っていると思っていますが、それは、私たちの想像を遥かに超えて大きい。ああ結局自分は、分かっていたなあと気づかせるためにこそ、イエス様はたとえをお語りになっているということなのです。つまり、たとえを受け取っていく、理解していく大切な鍵は「神の愛」、それも私たち一人一人に向けられている愛を受け取ろうと思って、聞くことなのです。その時、自分という実りを付けられないはずの土地が、イエス様によって実りを付ける者へと変えられ、さらにそこに大きな実が約束されている、「種をまく人のたとえ」を通して、イエス様が私たちにお示ししてくださっていることなのです。

どうして、祈禱会の時のことから今日の説教を始めようと思ったのかと言いますと、この箇所も受け止めていくために大切な鍵があると思ったからなのです。まずはこのイエス様の言葉を聞かれた時に、なかなかなるほどなるほどとはならない。何か難しいことをイエス様はお話ししているのではないか、そういう気がしてくるのです。しかし、この箇所も理解していく大切な鍵があると思いました。それは、神様とイエス様が一つであるということなのです。そのことをイエス様が伝えたいと思って読み進めていくと、このイエス様の言葉は、私たちに驚くべきことをお伝えくださっていることが分かるのです。そして、神様とイエス様が一つであるということは、イエス様を通して、神様の御心が欠けることなく、十分に示されているということなのです。今日も、イエス様を通して示されている神様の御心を受け取っていくために、示されていますヨハネによる福音書 8 勝 21～30 節の言葉に、共に聞いていきたいと思えます。

### ・十字架に進まれるイエス様

今日の箇所は、このような言葉で始まっています。「わたしは去って行く。あなたたちはわたしを捜すだろう。だが、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。わたしの行く所に、あなたは来ることができない。」と言われました。この言葉は、驚くような言葉であると思います。「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」とされていることなのです。これは、滅びへの道を一心に進んでいるその姿を言っているのです。つまり、イエス様は、ユダヤ人たち、神の民として選ばれ、普通に考えれば、神様に一番近いのではないかと思われた人々が、どんどん神様から離れてしまっているその姿を言っているのです。そのことを問われたのです。

しかし、聞いているユダヤの人たちは、こんな反応をしました。「わたしの行く所に、あなたは来ることができない。」とはどういうことだろうか、その言葉の方に引っかかったのです。そして、「自殺でもするのだろうか」と言ったのです。イエス様の言葉については、少し説明が必要だと思います。イエス様が、ご自身これから進まれる道についてくることはできないと言われた時、心にあった道とは、十字架にかけられる道なのです。この後、イエス様は、人間の罪を背負って、十字架にかけられる道を進んでいかれるのです。そして、その時、イエス様と共に歩んだ人は、一人としていなかったのです。多くの人たちはイエス様を十字架にかけられることを熱望しましたし、イエス様の弟子たちは誰一人例外なく逃げ去ることになりました。そうして、イエス様は十字架の道を進まれることになるのです。それで、「誰もついてくることはできない」と言われたのです。つまり、イエス様は皆に捨てられるようにして十字架にかかる、その道を既に心に置いておられたことが分かるのです。

#### ・罪のうちに死ぬ

ここに、もう一つ大切なことが言われています。彼らは全く反応しなかったと言うか、全く理解できなかつたのですが、イエス様は「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」と言われたのです。これは、再程見ましたように、イエス様が十字架にかかる道を進まれる時に、あなた方もイエス様を葬る側に回ることを意味しているのです。そういう形で、彼らがどんなに大きな罪を抱えて生きているかが明らかにされる、そのことをイエス様が言われているのです。

しかし、彼らは全く理解できなかつたのです。どうしてでしょうか。それは、彼らは自分が罪の中にいるとは、夢にも思っていないのです。神様のことは十分に分かっている、神様の救いに与ることができる道を自分たちは歩んでいると思っていたのです。ですから、「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」というイエス様の言葉が、自分に向けられているとは考えもしなかつたのです。実に、ここに彼らの本当の問題が示されているのです。

イエス様はこの後、言葉を重ねるようにして、「あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる、わたしは言ったのである。」、更に「『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」と言われたのです。ここでの「私はある」とは、後でもう一度触れますが、神様のことを指しています。あなたたちは、神様のことを思わず、この世のことだけ思っている、その意味で、神様を信じていない、だから「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる。」と言われているのです。何よりも、神様を大切に歩んでいると思っていたユダヤの人たちにとって、とても意外な言葉だったと思いますし、なんでこんなことを言うのだろうかと思っただけだと思います。

私は、ここまで読み進めてきて、何とも言えない気持ちになってきました。もちろん、ここでイエス様が問われているのは、ユダヤ人たちです。神の民として選ばれ、神様のものとして歩んでいる人たちです。私たちが言うところの旧約聖書を懸命に学び、研究し、どう生きていくべきか考え続けた人たちなのです。その人たちであっても、神様のことを本当の意味では受け止めて生きることはできていない。私たちは、イエス様の前に立って、戸惑っているユダヤの人たちを笑うことができるだろうかと思わされてきたのです。

勿論、私たちは、彼らのように神様に救っていただけるようなものであるとは思っていないと思います。しかし、神様に救っていただくために不十分なところがある、もっと神様のことをちゃんと受け止めなければならないとか、もっときちんとお祈りをできるようにならなければならないとか、そういうことを考えているのではないかと思います。ですから、この時のユダヤの人々と同じように、やはり神様のことを考えているようでありながら、自分自身のことをいつも見ているのです。そこから、神様との関係を考えようとしているのです。そうしますと、その姿とは、ここでイエス様が「あなたたちはこの世に属しているが、わたしはこの世に属していない。だから、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」と言われた言葉は、自分にも向けられていることを思うのです。そうすると、私たちに向かって、「自分の罪のうちに死ぬことになる」とイエス様は言われていることに気が付かされるのです。私たちをも、イエス様は問われていることを思わされるのです。

#### ・主は遣わされた

「あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる」というイエス様の言葉を悠長に聞くことができる人など一人もいないということが分かるのです。誰もが、このイエス様の言葉の前に立たなければならないのです。しかし、イエス様がどうしてこの言

葉を語られているのでしょうか。それは、知らず知らずのうちに滅びへの道へと進んでしまっている人たちを、本当の意味での救いの道へと導くためにこそ、イエス様は厳しく見える言葉をお語りくださっているのです。

では、一体どこに救いへの突破口があるのでしょうか。イエス様は言われるのです。「しかし、わたしをお遣わしになった方は真実であり、わたしはその方から聞いたことを、世に向かって話している。」と。つまり、イエス様が神様から遣わされた方である、つまり、神様がユダヤの人々に、必ずあなた方のところへ送ると約束された救い主であることを受け入れるということなのです。勿論、それについて何も証拠がないではないか、むしろ素性を考えれば救い主であるはずがないと多くの人は思っているのです。しかし、まず受け入れてみよと言われるのです。

証拠はない。だから、受け入れられないということは、常識だと思えます。以前お話したことがあると思いますが、高校時代の友人に、目の前で奇跡を見たら神様を信じると言われたことがあります。そうだと思うのです。信頼に足るかどうかが、人間の側が判定するのです。合格ならば、救い主として信じる、受け入れましょう。この時のユダヤの人々の態度とは、そういうものです。結局、人間の判断によって、最終的に決定するということになるでしょう。前回のところで、イエス様が「肉に従って裁いている」と言われるとおりだと思えます。しかし、イエス様がここで招かれる道は「私を遣わされた方がおられる」、言い換えれば「私は神様に遣わされた救い主」と受け入れて歩めということなのです。まずそれを受け入れて見よということなのです。そのことを受け入れて初めて見える世界があるということなのです。

以前もお話したことがあることですが、とても興味深く受け止めさせられたことがあります。数学において、ゼロというものは、証明できないのだそうです。1から1を引いたものをゼロとすると受け入れる。そういう仕方ではしか認識できないのだそうです。しかし、そのゼロを受け入れた時に、素晴らしい数学の世界が広がりますし、また、コンピューターの世界もゼロを前提として成り立っているのです。ですから、ゼロを受け入れた時に見える世界があるということなのです。

それになぞらえていけば、イエス様が神様から遣わされた、それは、人間の論理でその通りだとイエス何かがあるということではないかもしれない。しかし、それを受け入れていった時に、私たちには本当の驚くべきことが示されるのです。それは、「わたしをお遣わしになった方は真実」と、つまり、イエス様をお遣わしになった神様が真実であることが分かるのです。その大きな恵みに出会うことができるのです。

- 神は真実

この「真実」という言葉は、とても大切な意味を持っています。旧約聖書の言葉で、

もっぱら神様の御心を表す言葉として用いられている言葉が、この言葉の意味なので  
す。それは、慈しみであり、哀れみであり、正しさであり、そういう神様の御心の全  
てを表している言葉と言ってよいと思います。そして、この言葉の持っている意味合  
いを最もよく示しているのは、「私たち人間への深い思い」なのです。イエス様を約束  
の救い主として受け入れる時、このイエス様をお送りくださった神様の御心分かる  
のです。ヨハネの手紙で、「イエス様を通して、神様の愛が示された」という趣旨の言  
葉がありますが、まさにこの「真実」は、私たちを愛しぬく神様の御心なのです。神  
様が単なる審判者ではなく、愛を持って導こうとされている方であることが真の意味  
で分かるのです。

そして、そのような神様の御心がはっきりとわかる時が来るのです。それは「あな  
たたちは、人の子を上げたときに、初めて「わたしがあつた」といふこと」を分かるよ  
うになるとイエス様は言っておられます。それは、ここで「あなたたちは、人の子を  
上げたとき」と言われていることです。ここでの「人の子」とは、イエス様がご自身  
のことを言われる時の言い方です。そして、「上げた」とは、イエス様を十字架にかけ  
る時のことを言っています。つまり、「あなたたちは、人の子を上げたとき」と言われ  
ているのは、ユダヤの人たちが十字架の上にイエス様を付けていく、その姿を言っ  
ているのです。そうすると、この「あなたたちは、人の子を上げたとき」と言われて  
いるのは、人間の罪が極限まで行き着いているような場所ではないかと思ひます。神  
様がお送りになられた約束の救い主を、人間が抹殺をしていく、そういう時だからです。

しかし、その人間の罪が極みまで噴出している場所である十字架は、実は特別な意  
味を示していることも思はされるのです。すぐに心に浮かんだイエス様の言葉があり  
ました。少し前の3章14節から15節の言葉です。「そして、モーセが荒野で蛇  
を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子に  
よつて永遠の命を得るためである。」と。エジプトを脱出したモーセたちの荒野の旅  
において、罪の結果として死ぬものが、モーセの掲げた青銅の蛇を仰ぐと命を得るこ  
とができたのです。それと同じように、イエス様の十字架を、信仰をもって見上げる  
時に、人は必ず救われるのです。ですから、この人間の罪が噴出しているようなこの  
場所は、同時に、その罪を覆いつくすような神様の限りなく豊かな愛が示されている  
場所なのです。

ですから、ここでの「上げた」について、多くの人が指摘しています。ここでの「上  
げた」は単に、十字架の上げたことだけを指しているのではないということ。これ  
には、結局神様遣わされた救い主であることを表すことになる「高く上げる」の意  
味も含まれているということなのです。勿論、十字架にかけたユダヤの人たちは、そ

んなこと全く思っていないのです。自分たちが願った通りに、イエス様を葬り去ることができたと思っています。しかし、この十字架によるイエス様の死は、そのことを通して、イエス様が救い主であることを逆に表していくことになったのです。実際、十字架の許にいたローマから派遣された百人隊長は、十字架のイエス様を見て、「本当に、この人は神の子だった」と言っているのです。十字架に死なれるイエス様は、一見無力に死んでいかれるのです。しかし、その姿にこそ、人間に対する神様の深い愛が示されているのです。ですから、神様が、私たち人間に対して、いかに真実な方であるかが分かるのです。

・「わたしはある」

そして、イエス様が十字架に上げられた時に、はっきりと分かることがあるのです。それは「わたしはある」ということが分かるということです。「わたしはある」とは、先ほども触れましたが、神様が自らを表す言葉、自己宣言の名です。皆さんもそうだと思いますが、私はこの「わたしはある」という言葉を聞くと、ある聖書の箇所が思い浮かびます。モーセがエジプトから脱出するリーダーとして神様に召されていく時に、燃える柴の中から神様が語りかけられました。モーセが「どなたから遣わされたのか問われた時にどうこたえるべきか」というモーセの問いに対して、『わたしはある』という方から遣わされたと答えよ」と言われた箇所です。つまり、神様は、自らの名を「わたしはある」と言われています。ユダヤでは名はその本質を表しますので、神様は「わたしはある」方なのです。

「わたしはある」とは、日本語としてはとても不思議な言い方だと思います。しかし、聖書独特の表現なのです。あえてその意味合いをとらえて、日本語にしてみますと、「今まさにここに存在している」、そういう意味なのです。イエス様の十字架を通して、神様を知るのです。そこで受け止める神様とは、かつておられたでも、これからおられるでもなく、今ここに存在している方なのです。あの十字架にイエス様が死なれたのは、神様が見捨てた結果ではないのです。むしろ、神様がそこにおられ、神様の業としてなされているのです。それは、私たち人間を愛し、救う、その恵みを実現するための神様の働きなのです。ですから、あの十字架の場に、「わたしはある」、そこに神様がおられることが分かるのです。

イエス様は、私たちに、ご自身が神様の約束の救い主であることをお示しになるのです。それをまず受け入れて歩めと私たちを招いておられるのです。イエス様が約束の救い主と受け入れる時、本当に驚くべきものを見ることができるのです。イエス様を通して、神様の限りなき愛を示されている。そして、その愛は私たちに向けられているということです。そして、神様、「わたしはある」方であることが分かるのです。

今、この時、困難に見える状況の中に立っている私たちと共に、神様は歩んでくださる方なのです。そして、その私たちにこそ、豊かな愛を注いでくださるのです。そのようにして示される神様の真実を、私たちは知ることができるのです。イエス様こそが救い主、その信仰の道へと私たちを招いてくださっているのです。ですから、イエス様の招きにお応えして、イエス様が共に歩んでくださる道を煤で行きたいと心から願います。